

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 関西外国語大学留学生別科日本語科の統一シラバス 作成に基づいた中級後期日本語教材の開発

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学留学生別科 公開日: 2024-04-12 キーワード (Ja): 中級日本語, 日本語教育文法, 中級日本語シラバス, モジュール型教材, 接触場面 キーワード (En): 作成者: 高屋敷, 真人 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000199">https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000199</a>

## 関西外国語大学留学生別科日本語科の 統一シラバス作成に基づいた中級後期日本語教材の開発

高屋敷 真人

### 要旨

関西外国語大学留学生別科の総合中級日本語コース(Japanese 5 及び Japanese 6)と総合上級日本語コース(Japanese 7 及び Japanese 8) では、これまで各コースの担当教員によって教授法や学習法、評価法が異なっていたシラバスの改訂を行い、国際交流基金(JF) が2010年に策定した JF 日本語教育スタンダード(以下、JFs)と日本語能力試験(以下、JLPT) を参考に、2023年度秋学期より統一シラバスを作成し試用を始めた。本稿は、この新しい統一シラバスの策定に伴って行われた総合日本語中級後期コース(Japanese 6、以下 JPN6) におけるモジュール型教材(要望対応型教材)の開発と試用についての報告である。

【キーワード】 中級日本語、日本語教育文法、中級日本語シラバス、モジュール型教材、接触場面

### 1. はじめに

#### 1.1 関西外国語大学留学生別科総合日本語中級後期コース概要と使用教材

関西外国語大学留学生別科では、初級レベルと中級レベルの日本語レベルの格差が大きかったこと、中級レベルのコースが一つしかなく上級への橋渡しのレベル／の増設が必要であったこと等の理由で、2008年度秋学期(9月～12月)に中級後期クラス(総合日本語6、JPN6) を新設することになり、そのメイン教材の開発プロジェクトが新たに始められた。新しい教材は、筆者(高屋敷)が執筆を担当し、以来、新しく作成されたモジュール型教材を教科書として使用している。この教材開発プロジェクトは、2014年度から関西外国語大学国際文化研究所(以下、IRI) の共同研究プロジェクトとして採用され、以後10年近くに渡って教材について学生

へのアンケート調査が行われ、調査の分析結果に基づいて教材の改訂が続けられてきた。

## 1.2 関西外国語大学留学生別科総合日本語中上級コースの統一シラバス策定と教材開発

関西外国語大学留学生別科の総合中級日本語コース(Japanese 5 及び Japanese 6) と総合上級日本語コース(Japanese 7 及び Japanese 8) では、これまで各コースの担当教員によって日本語教授法、学習法、評価法が異なっていたシラバスの改訂を行い、国際交流基金(JF) が2010年に策定した JF 日本語教育スタンダード(以下、JFS) と日本語能力試験(以下、JLPT) を参考に、2023年度秋学期より統一シラバスを作成し試用を始めている。本プロジェクトの学術的問いは、この iFS の理念に基づき、学習者と日本人母語話者との相互理解のために必要な「課題遂行能力」と「異文化理解能力」をいかに養成し、そのために必要な教材を開発、作成することである。具体的には、中級学習者の多種多様なニーズに応えるべく、学習者へのニーズ調査等を行い、授業時の会話やディスカッションの話題を選び、それを教材化していくことである。また、文法項目についても、JLPT の N1 から N3 で扱われる文法項目が留学生の日常生活の日本語接触場面で役立つものであるかどうかを調査し文法シラバスを見直していく予定である。これらを実現させるため、留学生のニーズに対応し得るモジュール型教材(要望対応型教材)の作成を目指している。このような中上級レベルの学習者の日本語接触場面の調査やニーズ調査に基づいた4技能習得のためのモジュール型教材の作成は、先例がないものである。

モジュール型教材の開発についても、国際交流基金の IFS と JLPT の N2 及び N3 レベルを基軸として作成を行った。国際交流基金は「ヨーロッパ共通参照枠 Common European Framework of Reference for Languages」を基に日本語での使用場面を想定し、「みんなの Can-do サイト」としてネット上に提供している。今回の教材開発の目的は、この IF Can-do での具体的な言語活動の例を参照し、実践的に留学生のコミュニケーション運用能力を高めるため、彼らが日常生活で本当に必要としている文脈からシラバスをデザインし、彼らの興味・関心、ニーズに対応し得る教材を作成することである。また、学習の評価でも学習者が獲得した言語知識を用い、実際にどのくらい日本語を使用できるのかということに焦点を当てている。そのため、各ユニットの話題についてパワーポイントや動画を用いた発表、あるいは、

プロジェクトワークを行い、自分が真に話したいと思う話題について留学生が自ら考えて日本語が使用できるような独自の実践的な学習設計を試みている。

### 1.3 中級レベルにおける接触場面の重視とモジュール型教材の効用

2008年から続けられている中級後期のモジュール型教材の作成に際しては、「接触場面」(ネウストプニ1995)や「モジュール型教材」(岡崎1989)という教育理念を参考に開発を進めている。ネウストプニーは、接触場面について、下記のように定義している。

外国人話者が日本語とはじめて接触するのは、ほとんどの場合、「接触場面」(「外国人場面」ともいわれる。)の一ケースの教室場面であるし、その後の数年間、接触場面にしか参加しないであろう。外国人が、母語話者によって、「準母語話者」として認められないかぎり、彼らの参加する場面は、接触場面なのである。この接触場面は、「母語場面」(話し手のすべてが母語話者)とは、かなりの点で異なった特徴をもっている。したがって、今までの語学教育において、母語場面しか教育の目標にしてこなかったのは、あまり現実的な態度ではないといえるであろう。(ネウストプニ-1995, 187)

このようなネウストプニーの指摘を受け、本学の留学生が日常生活で日本語でのコミュニケーションの問題に直面した時も、「その問題(障害)を、日本語らしさを失わずにどう処理できるか」(ネウストプニ-1995)ということ念頭に置いて教材開発を行った。教材の会話作成の際は、常に本学交換留学生の「接触場面」を考えに入れ、実際に彼らが自分の日常で遭遇するような実践的な場面にこだわり、教室活動が教室外の接触場面と一致するように配慮した。詳しい経緯については、拙論「モジュール型教材による中級後期日本語教科書開発プロジェクト」(高屋敷2012)を参照してもらいたい。

モジュール型教材とは「教科書のように特定の順序に沿って一つ一つの課を学習するタイプの教材とは違い、学習者が既に学習し終わっている項目から一定程度独立して使えるようにした教材」である。(岡崎1989)岡崎は、「コースの早い段階で構文シラバスの教科書との進行とは別に生起して来る学習者のニーズ」につい

て重要な指摘をしている。岡崎によると、モジュール型教材とは「通常の教科書が順序を無視して使うのが難しいのに対して、学習者のニーズが新たに生じたその時点においてそのニーズに合わせた形の活動を実施するような使い方を可能」(岡崎1989)にする教材である。岡崎は、モジュール型教材を「コースデザインの柔軟化」を可能にするものの一つとして挙げている。(岡崎1989)

筆者は、オーストラリアで、中等レベル(中学生、高校生)の日本語教科書『モジュールで学ぶよくわかる日本語①②③』(高屋敷他1993;高屋敷他1996;高屋敷他1998)の開発に携わっていたのだが、この教科書の執筆にあたっては、当時制定されて間もないオーストラリアの全国カリキュラム「YOROSHIKU シリーズ」がモジュール形式で策定され、それに沿ってリソース集が発行されたことがその契機となった。(高屋敷1999)この教材を作成する際も、オーストラリアの中等レベル(中学生・高校生)の学習者の実生活に基づいた身近なトピックを選定し、そのトピックについてコミュニケーションを進めていく上で必要と思われる語彙、文型、表現などが様々なアクティビティを通して身につくように配慮した。しかし、中等レベルの日本語初級学習者においては、その時々好きな話題で会話を促すようなコミュニケーションを重視する教え方であっても、しっかりと基本となる初級文型を積み上げつつ学ぶ必要もあったため、そのバランスをうまくとることが非常に難しかった。そのため、この教材を効果的に使用するには「中等レベル(中学生・高校生)」の学習者で、50-'60時間程度学習した者が望ましい」(高屋敷他1993)という前提が必要となってしまった。

しかし、初級文型を体系的に学ぶ必要がある日本語学習者とは異なり、JPN6の留学生は中級後期レベルであり、媒介語を使わず日本語のみでのコミュニケーションがある程度可能なレベルであるので、中級レベルでの学習項目(文型)を一定の順序で積み上げていく必要がないことから、モジュール型教材の使用はこのレベル/でこそ有用性が見出せると思われた。また、モジュール型教材は、岡崎が主張しているように常に変化流動する学習者のニーズに柔軟に対応できることも長所の一つである。(岡崎1989)以上のような観点から、JPN6の教科書は、学生のニーズに合わせて柔軟にシラバスが変更できるモジュール型教材が適しているのではないかと判断した。筆者は関西外国語大学留学生別科で2002年から本学の交換留学生の変化を見続けているが、2010年以降、彼らの来日の動機はますます多岐に渡り、

日本についての関心事項も日本語学習のニーズも細分化し、言うなればオタク化してきているように感じる。また、留学生の興味関心の変化のスピードは、インターネットで出まわる流行に合わせ、以前とは比較にならない程早くなっている。時流に合わせて新しく作成した教材も、数年後には全く時代遅れになり、すぐに使い物にならなくなってしまう。しかし、モジュール型教材を採用することで、最近の流行に乗り遅れず学習者のニーズが新たに生じた時点で古くなった箇所のみ簡単に取り換えることが可能になる。出版型の教科書とは違い、モジュール型教材は、シラバスや教材の変更も必要に応じて容易に出来るので、昨今の早いスパンでの留学生のニーズ変化にも対応できるのではないかと考えた。

#### 1.4 総合日本語6 (JPN6) のコース概要

関西外国語大学の総合日本語コースは1学期15週間で、90分授業が週に3コマ行われている。JPN6 は、1学期に7ユニットを学び、4コマの授業で1ユニットが終えられるようにシラバスを設定している。学習者は、自ら各コにニットのトピックについて日本語でディスカッションを行うことを最終目的とし、そのために学生自身がディスカッションのための資料を探し、ディスカッション・ポイントを考え、ディスカッションの司会を行えるようにコース設計されている。各ユニットのディスカッション・リーダーを決める際は、できるだけ学生が自分の好きなトピックを選べるようにしている。各コにニットは、それぞれ1コマ目と2コマ目のクラスでは、ユニットのトピックの導入と各コにニットで学ぶ文型(6-7文型)を用いた文型定着のための会話練習を行い、3コマ目までに単語リスト(50,-',55の新出単語)を覚えることとし、3コマ目の授業では単語クイズと単語表現練習用シートを使用した作文練習を行っている。4コマ目では、ユニットの本文会話を用い、会話練習、作文練習、聞き取り練習などを総合的に行っている。

このように一つのユニットを終え、トピック(本文内容)についてのディスカッションに必要な文型と語彙を学習した後で、ディスカッション・リーダーがディスカッションを行うようにしている。リーダーは15"20分くらいで、ディスカッションのポイント(テーマ、内容、背景など)について調べて来たことを説明する。その後、自らが考えてきたコにニットのトピック(本文内容)についてのディスカッション・ポイントについて最終的にクラスで意見を聞き質疑応答を行うことになっ

ている。ディスカッション時は、教師はできるだけ介入しないようにし、クラスの主導権はすべて司会者であるリーダーに任せるようにしている。この方法は、学生の積極的なクラス参加、発言回数の増加などに効果があるように感じている。なお、ディスカッションでの発言回数は、クラスパフォーマンスとして成績の5%になると学生にはシラバスで伝えてある。

## 2 統一シラバスの策定に伴った JPN6 の改訂事項の概要

改訂前の本学の総合日本語コースのレベルは下記のように設定されており、JPN6 は中級後期レベルに該当し、最終的に日本語能力試験 N2 レベルの合格を目的としたコースであった。

初級	: JPN1 ~JPN4 (初級教科書『げんき I』 『げんき II』 使用)
中級	: JPNS (中級前期) (日本語能力試験 N2/N3 レベル) JPN6 (中級後期) (日本語能力試験 N2 レベル)
上級	: JPN7 (日本語能力試験 N1 レベル)
アカデミック	: JPN8 (日本語能力試験 N1 レベル以上)

JPNS と JPN6 のコースの目的は、日本語能力試験 N3 から N2 への合格ラインを目指した日本語能力の養成であったのだが、このコースの目的が制定されたのは、2008年で、国際交流基金が日本語能力試験を改訂する2010年より前であったため、N3 から N1 でそれぞれ取り扱われる文型の振り分けが実際のコースレベルと合致しないままになっていた。国際交流基金が日本国際教育支援協会と共催している JLPT は、1984年に1級から4級の4レベルで開始されたが、2010年に「課題遂行のためのコミュニケーション能力」を測定対象とし、2級と3級の間レベルを新設し、N1 から N5 までの5レベルになった。(国際交流基金2017)このため、JPN6 で N2 レベルとして扱っていた文型のいくつかは N3 で扱われるようになってしまっていたのだが、そのままになっていた。今回の統一シラバスの策定では、各コースでレベルの見直しを行い、下記のように制定した。

JPNS : N3 で取り扱われる文型 (文法項目)

JPN6 : N2/N3 で取り扱われる文型(文法項目)

JPN7 : N2 で取り扱われる文型(文法項目)

JPN8 : N1 で取り扱われる文型(文法項目)

IRI の共同研究プロジェクトとして助成を受けた2014年以降、毎年改訂を続けてきたが、2023年春学期終了時の各ユニットのトピックは下記の通りである。

Unit 1 どんな SNS、使ってるの？

Unit 2 交通機関のマナー

Unit 3 制服についてどう思いますか？

Unit 4 和食ブームって本当？

Unit 5 関西は好きですか？

Unit 6 18 歳って大人？

今回の大幅な教材の改訂において、各ユニットのトピックの選定については、JF 日本語教育スタンダードの15のトピック(まるごとサイト)を参照し、初級レベルで扱う自分の日常生活の身近な話題から段階的により個人的、社会的な話題への移行を念頭に置き、さらに岡崎他が提唱している学習者の自立を促すカリキュラム・デザインに則り、留学生の個々のニーズや個性を自発的に引き出せるようなカリキュラムをデザインすることを心掛けた。(岡崎他2003)

筆者は、2004年度から継続して中上級レベルの留学生にアンケート調査とニーズ調査を行っており、その結果を基に学習者の要望を聞き、自分の好む教材を学習者に選んでもらうという試みを読み書きのコースで行っている。(高屋敷2011)田中・斎藤は学習者のニーズや興味・関心に寄り添えるように選択可能な教材をリソースとしていくつか準備しておくことを提唱しているが(田中・斎藤1993)、中上級レベルの読み書きコースでも2004年から過去のアンケート調査の結果を基に学生の反応が良かったものを学習支援のための「リソースバンク型教材」(田中・斎藤1993)としてプールしてあったので、今まで中上級レベルの留学生の興味を引いた話題についても考慮に入れることにした。新しいユニットの話題と本文の会話で取り上げた内容は下記の表1の通りである。



表1新ユニットのトピックの本文会話の内容

<p>Unit 1 SNS と私たちの生活</p>	<p>自分の国の SNS／ソーシャルメディア、よく使うアプリ、便利なアプリ、インターネット・スラング、emoticons5 emilkaom可L LINE のスタンプ、ソーシャルメディアの問題点(LINE 疲れ、ネット中毒、睡眠障害)</p>
<p>Unit 2 交通機関とマナー</p>	<p>自分の国と日本のマナーや習慣の違い、外国人への差別や偏見、公共の場でのマナー、自分の国と日本の交通機関、PDA の境界、日本に来てびっくりしたこと・意外だったこと、マナーが悪い人に注意をするかどうか？</p>
<p>Unit 3 ジェンダーギャップ指数と私の国</p>	<p>自分の国のジェンダーギャップ指数、男女格差(政治家の数、給与の格差など)、学校生活のジェンダー問題、男女のステレオタイプ、ジェンダーフリーの制服、配偶者の呼び方(ご主人/だんなさん/奥さん/家内はおかしい?)</p>
<p>Unit 4 和食と世界の食べ物</p>	<p>世界での和食ブーム、自分の国の日本食や和食レストラン、自分の国の日本食チェーン店、ローカライズしているかどうか、日本食って本当に健康的？自分の国に本格的な和食レストランがある？自分の国の名物料理、おもしろい・ユニークな食べ物や店、コンビニやスーパーの違い</p>
<p>Unit 5 関西は好きですか？</p>	<p>関西弁と標準語、日本や自分の国の方言、関西・関西人・関西弁のイメージや文化、関西と関東の比較、大阪と東京を比べて？ 関西の観光地、食べ物、有名な物、関西でのおもしろい経験、人気のある観光地の割合、観光客数の推移</p>
<p>Unit 6 迷信を信じますか？</p>	<p>イギリスの迷信ランキング、自分の国の迷信や言い伝え、日本の迷信や言い伝え、超常現象:幽霊、前世、第6感、UFO、伝説の生き物:鬼、河童、妖怪、ジंकス、デジャブ、お守り、おみくじ、占い、都市伝説、風水など</p>

各ユニットのトピックは、以前の本文内容が多少限定的であったのに対し、留学生が自国と比較し、より広範にディスカッション・トピックを選べるように工夫した。各ユニットで大体3つの会話で構成されていた本文の会話は、5つから6つの会話になるように内容を分割し、短い談話の形式に変更した。それに伴い、新出単語数も1週間で覚えることが出来るように数を制御した。

### 3. 2023年度秋学期のアンケート調査

2023年秋学期の学期末に、質問紙によるアンケート調査を行い、筆者が担任であった JPN6 の2コースの履修学生に回答してもらった。履修学生32名中、回答のあった留学生25名の内訳は、下記の通りである。

男女比： 男子学生11名 女子学生14名

国籍： アメリカ16名、チェコ、スウェーデン各2名、カナダ、メキシコ、ラトビア、ロシア、香港、台湾、ウクライナ各1名

今回の調査では、まず、パケット全般と各コにニットに対する評価、「各コにニットで取り上げたトピック／本文の内容はいいと思うか」、「教材パケットは全体的にいいと思うか」についての回答、更に、rJpN6 で取り上げて欲しいトピックは何か」について回答を得た。パケット全体についての評価は、「全体的にパケットは良かったと思うか？」という問いへの回答として図1のような結果となった。回答者25名中、“strongly agree”が17名(68%)で、“agree”の7名(28%)を合わせ、96%の学生が「良い」という評価であった。1名(4%)が‘neutral’で、“disagree”と“strongly disagree”と評価する学生はゼロであった。JPN6 のパケットの全面改訂は数字上では高評価を得ることが出来た。

全体的にパケットは良かったと思うか？

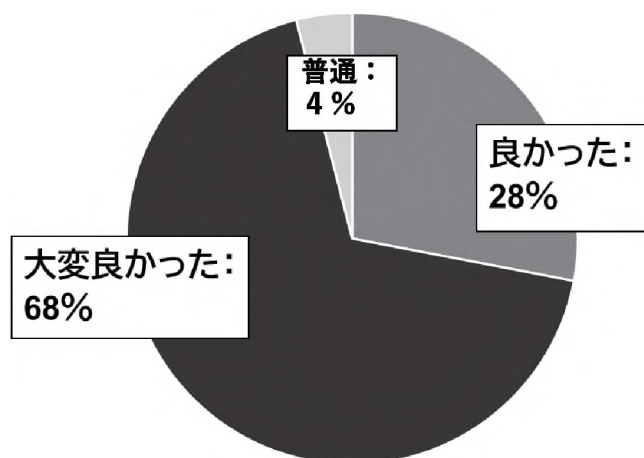


図1 「全体的にパケットは良かったと思うか？」

では、次に各ユニットについての評価を見ていくことにしよう。

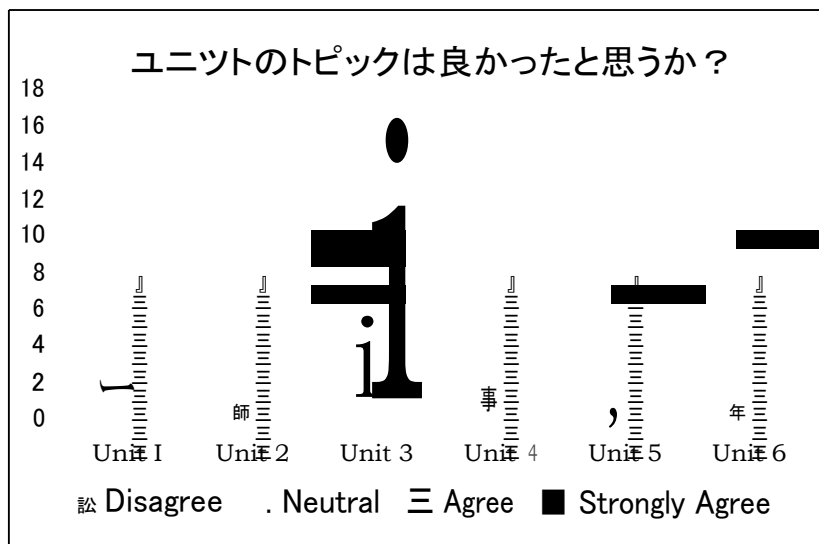


図2 「ユニットのトピックは良かったと思うか？」

各ユニットの評価についても“strongly agree”が25名中13名から16名と6割近い学生から高評価を得ることが出来た。“strongly disagree”は0名で、“disagree”は、Unit 3「ジェンダーギャップ指数と私の国」の1名のみにとまった。しかし、ジェンダー問題を扱う Unit 3 については、16名の学生が高く評価しており、過去10年間の結果を見ても、学期によって評価が分かれるユニットであったので、今回の教材の改訂は合格点をつけても良いように思われる。

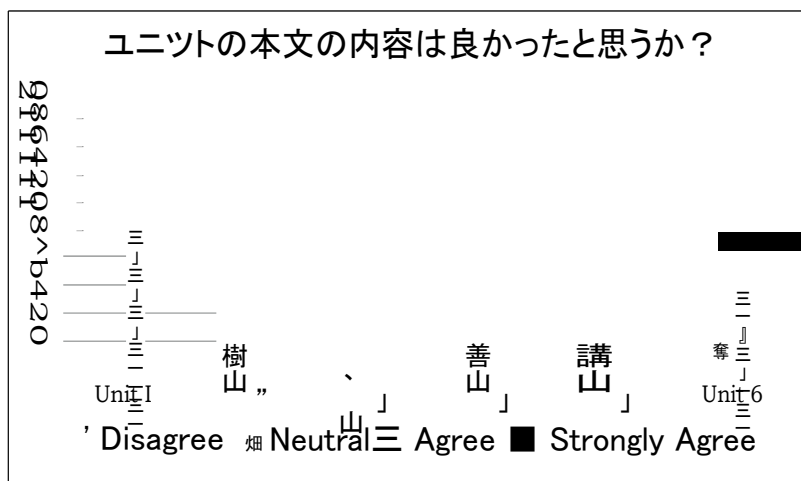


図3 「ユニットの本文の内容は良かったと思うか？」

同様に各ユニットの本文の内容の評価についても“strongly agree”が25名中13名から18名とほぼ6割以上の学生から高評価の回答を得ることが出来た。“strongly disagree”は0名で、“disagree”は、Unit 5「関西は好きですか？」の1名のみであった。

今回の本文の書き替えを含むパケットの全面改訂は、総じて高評価を得ることが出来た。教員側では、Unit 1「私たちの生活」とUnit 5「関西は好きですか？」については、留学生が好む話題ではないかと予想していたが、調査結果を見ると他ユニットと比較し、期待していた評価が得られなかった。昨今の傾向ではあるが、SNS関連の話題については、学生の興味の移り変わりの速さに最も影響を受けやすいトピックであると思われるので、今後も学生の動向を注視していく必要があるであろう。

次に、「パケットで扱われた文型と単語は、日常生活で実際に役に立ったと思うか？」という設問への回答を図4と図5に示した。

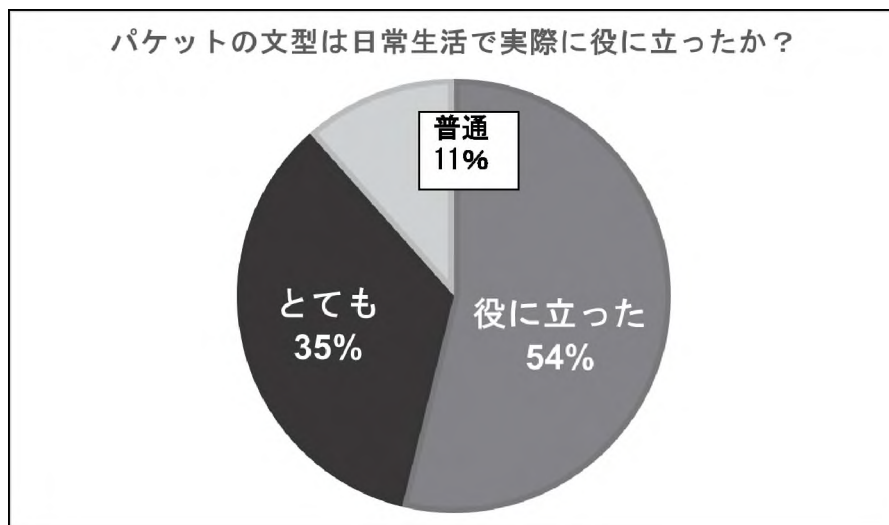


図4 「パケットの文型は日常生活で実際に役に立ったと思うか？」

パケットで取り扱った文型に関しては、「大変役に立った」が9名(35%)で、「役に立った」が14名(54%)であった。「普通」と回答した学生は3名(11%)であったので、89%の学生がパケットで学んだ文型は日常生活で実際に役に立ったという回答が得られた。今後、更に留学生の日常生活で有用な文型は何なのかについて、日本語使用の接触場面の調査を進め、教材の改訂を続けていきたい。

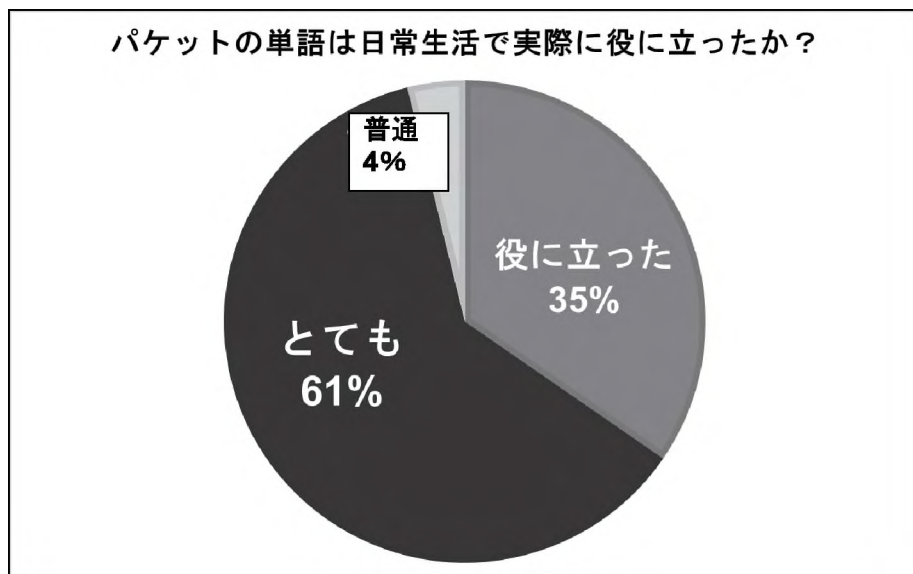


図5 「パケットの新出単語は日常生活で実際に役に立ったと思うか？」

パケットで取り扱った文型の評価は、上述したように高評価であったが、新出単語に関しては、文型以上に非常に高い評価を得ることが出来た。「非常に役に立った」が16名(61%)で、「役に立った」の9名(35%)と併せて96%の留学生が役に立ったと回答している。調査結果を詳しく見ると、パケットの本文会話で出た「見て見ぬふりをする」「耳が痛い」「～に目がない」「あり得ない」「目のやり場に困る」などの談話表現や「購入する」「検索する」などの漢字二字熟語、文化や習慣を説明するための「かにかまぼこ(「カリフォルニア・ロール」の中身を説明するため)」などの単語が役に立ったという回答があった。中級後期レベルになると、例えば、「ジェンダー問題や自分が見た映画やドラマについて日本人と深く会話をしたい」「自国の社会問題や文化、習慣について自分の考えを伝えたい」というような回答を寄せた学生もあり、そのような談話表現や漢字二字熟語等の語彙を増やしたいと考えている留学生にはパケットの新出単語が役に立ったのではないかと思われる。

#### 4. まとめ

アンケート調査の結果から総合的に見て、今回の JPN6 のパケットの大幅な改訂については、「文型」「単語」「トピック」「本文の内容」それぞれ高評価を得ることが出来たように思う。しかし、「rsNs」と「関西弁」については、教員が想定して

いたより留学生の関心度が低という結果になった。もちろん1学期だけの調査結果で判断することはできないが、今後、各ユニットへの評価を注視していきたい。

アンケート調査の最後に聞いた「今後 JPN6 で取り上げて欲しいトピックは何か」という設問への回答は下記の通りである。

各2名

「たくさん話題について色々話せて良かった」

「スポーツ」「病気の症状」

各1名

「広告」 rNHK のニュース用語」「ビジネス日本語(敬語)」「買い物」「就活」

「伝統文化」「伝統行事」「世界の文化」「宗教」「政治」「デートの仕方の違い」

今後も学期ごとの教材パケットについてのアンケート調査を続け、留学生のからの声を蓄積し、関西外国語大学留学生別科に留学に来ている北米を中心とした欧米系の学習者という観点から、彼らにより主体的に自立して社会的な話題についてコミュニケーションが出来るような方法について考えていければと思う。具体的には、彼らの興味・関心、ニーズについて、より広範な調査を続け、中級後期のレベルに適したトピック、それに伴う文型・談話表現、単語の選定などを行っていきたい。また、学習者がもっと自由にその場で自分が言いたいことが言えるように発言を促す工夫、教師や教授法を含めた使用教材のあり方についても固定観念に捉われることなく進めていきたい。一つのトピックについて多様な解釈があること、あるいは、多角的な意見交換ができるようになることなどを念頭に置き、そのような教室活動に柔軟に対応できる教材開発を目指していければと考えている。今後も留学生へのニーズ調査やパケットへのアンケート調査の結果の分析を継続し、iF Can-do の具体的な言語活動とも照らし合わせ、内容や文法項目が合わないユニットについては、直近の留学生のニーズ、興味・関心を取り入れ、教材の改訂を行う予定である。また、より留学生の希望に沿う新たな教材のトピックについても再考し、現行のパワーポイントや動画を用いた発表やプロジェクトワークとは別の形での新たな教室活動の導入なども視野に入れ、教材を改善していきたい。

参考文献

岡崎敏雄(1989)『日本語教育の教材』アルク

岡崎洋三・西口光一・山田泉編著(2003)『日本語教師のための知識本シリーズ③  
人間主義の日本語教育』凡人社

国際交流基金(2017) rji' 日本語教育スタンダードに基づいた評価と日本語能力試  
験の合否判定との関係―最終報告書―

<https://www.ifstandard.ipf.go.jp/pdf7ifsilptreport2017.pdf> (2023年12月19日)

国際交流基金(2017)「『まるごと』の理念と特徴」『まるごとサイト』

<https://marugoto.ipf.go.jp/teacher/feature/> (2023年12月22日)

J.v.ネウストプニー(1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店

高屋敷真人(1999)「海外日本語教育事情:80年代後半に“Tsunami”現象―オース  
トラリア」『海外就職'99 日本語を教える』アルク

高屋敷真人(2011)「学習者主体のディスカッションによる上級読解授業の実践―  
学習者が読み物教材を選べる上級読み書き授業―」『関西外国語大学留学生別科  
日本語教育論集』21号 pp.15-35.

高屋敷真人(2012)「モジュール型教材による中級後期日本語開発プロジェクト」『  
関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』22号 pp.119-133.

高屋敷真人他(1993)『モジュールで学ぶよくわかる日本語①』アルク

高屋敷真人他(1996)『モジュールで学ぶよくわかる日本語②』アルク

高屋敷真人他(1998)『モジュールで学ぶよくわかる日本語(③)』アルク

田中望・斉藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際―学習支援システムの開発―  
』大修館書店

([mtakavas@kansaigaidai.ac.jp](mailto:mtakavas@kansaigaidai.ac.jp))